

和光幼稚園・和光鶴川幼稚園の教育

大瀧三雄 OTAKI Mitsuo

——子どもの苦悩と親の悩み

初めまして、大瀧三雄といいます。私は和光学園の幼稚園に勤めて30年目です。19年間担任をして、この11年間は主事と園長を務めています。加藤先生が言われたように、私たちも、90年代に入ってから幼稚園に入ってくる子どもが変わったと感じています。私はその頃40過ぎで、少しは自分なりの見通しを持って保育ができるかなと思った矢先で、「本当にこのまま、この仕事を続けていけるのだろうか」と相当苦しみました。戸惑いの中で加藤先生や汐見先生に会い、何とか希望を見出しながら、ここまで保育に関わってきました。

幼稚園に入ってくる子どもには、本当に様々な子がいます。10年程前になりますが、M君とI君という男の子が和光鶴川幼稚園に入ってきました。この2人は地域でしょっちゅうトラブルを起こしていたようで、大変な子どもだという噂がたっていて、お母さんたちから「あのトラブルメーカーの2人が、和光鶴川幼稚園に入ったんですね」なんて言われました。それで入園してくると、やはり、自分がちょっと思うようにいなくなると、他の子を押しのけたり、手を出して人をたた

いたりということがありました。なぜそんなことをするのか尋ねると、結構単純で、「邪魔だったから」とか、「僕がこれを使いたかったのに、持って行っちゃった」などと言うのです。



M君とI君のお母さんに共通していたのは、子どもが嫌いだという言葉でした。「私はこの子どもが嫌いです、先生。だからわからないんです。嫌いなんです」と言うのです。2人ともお兄ちゃんがいたのですが、お兄ちゃんは2人と違って、お母さんの言うことを聞く子どもだったのです。お母さんたちにすれば、「お兄ちゃんは優秀で、下の子どもはどうなるか」という気持ち、「私、見当がつかない」という戸惑いがあったんですね。その子たちの巻き起こすトラブルに、どうしていいかわからないという思いが、「嫌い」という言葉になっていたんですね。それでM君もI君もかなり怒られて育ってきていました。少し人間に不信を持っている子どもは、抱っこされるのを嫌がる人が多いんですけど、その子たちもそうでした。でも幼稚園3年間で、私たちと生活したり話したりしているう

ちに、M君もI君も抱っこされるようになってくるんですね。抱っこを求めるようになってくると、トラブルは少なくなりました。

それから最近子どもからよく聞く言葉に、「お母さんは、僕が好きだから怒るんだよね?」というのがあります。それを先生に何回も言ってくるのです。やはりお母さんに怒られることで、「お母さんは僕の何をどう思っているんだろう」という不安があって、教師のほうにそういうふうに聞いてくるのだろうと思います。

先日もうこういうことがありました。ある子が幼稚園に遅くまで残っていたら、お母さんが「あんたなんか、もう置いていきます」って、自転車に乗って1人で帰ってしまったのです。子どもがあとから道路を走って追いかけて行って、危ないので私も追いかけて走りました。途中でお母さんが止まって子どもを乗せていきましたけれども。こういう出来事の中で、お母さん自身はかなり子育てに悩んでいるなあと感じます。

親の悩みは学級親和会でも感じています。和光の幼稚園では、月1回、学級親和会といって親と教師と一緒に子育てについて話をする機会があるのです。その学級親和会で「期待」ということをテーマにして話した時があったのですが、そのあとにあるお母さんから次のような感想が来ました。上の娘が中学生で、下の子が幼稚園児のお母さんです。

「上の娘を育てる時はものすごい期待をかけていました。当時は娘も期待に答えてくれていましたが、最近は『重いからやめて』などと言ってきます。娘の同級生で、父はバイオリニスト、母はピアニストのお子さんがいます。その子も親の期待に、小学校の頃は目いっぱい応えていました。しかし、今は何と

バレーボール部。土日も試合、わざと大切な指をいじめているような感じです。そのお母さんと先日話し込んだのですが、やっぱり『期待』って難しいと。中学校に入ってからバイオリンもピアノも全く触れないそうです。そして、その弟君が2年前に、難しい病気になったんです」。そのように書いてあって、最後の方には「すると変な期待をかけて、自分の好みに子どもを仕上げようとするもののむなしさに気づくのです。きっと私も、そのあたりから変わったみたいです。……だけどやっぱり、子どもには、賢明な女性になってほしいと期待します」とありました。

お母さんたちも、今この格差社会の中で、子どもたちがどのように生きていけばいいのか、自分の子どもをどう育てたらいいのか、ということに悩んでいる。その中で親の価値観を子どもに向けてしまい、子どもが苦悩している。僕はそう思っています。

——子どもたちのものづくりから

十数年前のことですが、やはり苦悩している子どもがいて、何かあると他の子を押し倒してしまうということがありました。その子のことを皆で考えていた時に、野津田山に遠足に行った時はそういう姿が見られなかったことに思い当たりました。そのことが僕らの教育活動を考え直すきっかけになります。和光幼稚園、和光鶴川幼稚園というのは、それまでは課題を設定し、その課題を乗り越えて自分のものにしていく、そういった活動が組まれることが多かったのです。けれども、そのような活動を続けていったとして、苦しんでいる子どもたちにとってどのような意味があるのだろうかということを考えました。

今は、一緒に体験することの面白さを大事にしたいと考えています。子どもたちが物に向かいどのように興味を広げ追求していくのか、僕らはそこにどのように関わっていったらいいのかということを考えてみると、子どもたちは物と関わっているときに、その物を媒介にして他者とも関わっているのです。そのような活動を通して、子どもたちの関係もできていくのです。

和光の幼稚園ではいろんな物づくりを行っています。その一部を紹介したいと思います。

泥遊び

子どもたちは泥があると、チョコレートをつくったり、いろいろなことをします。重要なのは、こうして砂場で一人ひとりで遊んでいるようだけれど、友だちのやっているのを見ながら、自分がどうしようか考えているということです。単に自分と土との関係を生きているのではなく、お互いの姿を見ながら新しい世界を生み出しているんですね。



紙工作

紙工作で様々なものを作って遊んでいるところです。作ったら終わりじゃなくて、子どもはいろんなことを考え、その考えたことを自分のものにしていきます。約2～3週間遊

ぶこともあるのですが、「あの人のあそこが面白かったよね」といったかたちで、友だちとのつながりができていきます。



木工

木工でも様々なものをつくります。おととしになりますが、印象的な出来事がありました。ずっと船を作っていた男の子がいました。自分で釘を打っていくと形ができる。友達の作ったものを見て、また形を変えながら作る。そうやって彼は夏休み前まで約4週間、ずっと毎日、幼稚園で船づくりをしていたのです。その姿を見たお母さんが、夏休みにもたくさんやらせてあげようと考えて、金づちや釘や木片を買ってきて子どもに与えたんですね。それで夏休みに家へ船を持って帰ったのですが、子どもは一切、それには触れなかったそうです。やはり周りに一緒にやっている人が



いて、自分は どうしたいということがでてくるのだと思います。

ものづくりだけではありません。技の遊び、なわとびや竹馬といった遊びも友達との関わりの中で成立しています。なわとびであれば、友達が跳ぶ、それから縄を使って多様な遊びをする。その面白さを見て、自分もああなりたいという思いを持ちます。その思いがまた、子どもを物事へ向かわせていく意欲につながっていきます。ですから幼稚園では、ものや文化を媒介にしながら友達とつながっていくことが大事なのだと思います。

——遊びの中で関わる

和光幼稚園と和光鶴川幼稚園では、研究会を行って実践をまとめています。その中から幾つかの実践を紹介しましょう。

まず一昨年の3歳のクラスで行われた「種の実践」です。誕生会でブドウを食べました。そのときにブドウの種を食べちゃった子がいて、先生が「えっ、種を食べちゃった？ じゃあ、芽が出てくるかね」と冗談を言ったのです。そこから始まって、「先生、種まいたらブドウが幼稚園にいっぱいになって、毎日ブドウのおやつだよ」というチヒロ君の言葉をきっかけに、種まきが始まります。芽が出るかな、だめなんじゃないかな、なんて言いながら、先生も一緒にいろいろな種をまきました。家でみかんを食べた時の種をベランダの所にまいた子もいました。

そうやって種をまくと、「次はどうなるかな？」ということが子どもたちの間で話題になります。トウゴ君という子どもはトラブルが多かった子どもなのですが、水撒きをしながら一緒に関わっている時にはトラブルがなかったそうです。他の子どもと一緒に「じゃあ、水汲んでくるね」という形で関わりをもつことができた。それからコウ君という子どもがアドガボの種を持ってくるということもありました。大きな種がやってきたことによって、またどうなるか関心がふくらんでいく。子ども達にとっては先の見えない種まきで、一緒に考えて夢を持ちながらドキドキしていく面白さがありました。

次に昨年度の、トラブルの多かった4歳の子どものたちの実践を紹介します。4歳はもともと、幼稚園では一番トラブルが多い時代なのですが、そのときはなかなか子どもたちがかみ合わなかったのです。鬼ごっこをしてもルールをどうこうとなつて子どもが怒ってしまう、そういったことが多くて、先生もどうしようか悩んでいました。そういったときに、ある子どもが、お父さんと遠足に行った

ときにお父さんが写真を撮っていたのを覚えていて、「先生、カメラつくりたい」と言ったのです。そこから紙工作のカメラ作りが始まりました。先ほども紹介したように、幼稚園ではいろいろな紙工作を行うのですが、カメラは普通はもっとあとにつくるんです。でもその年は、その子がそう言ったことによって、早くつくることになりました。そうやって紙工作をしていくと、それが子どもどうしのつながりをつくっていったのですね。二学期になってまた鬼ごっこをやったときには、また違った関係で鬼ごっこができたということがありました。

この出来事から考えたのは、計画にこだわってはいけないということですね。幼稚園には計画があるのですが、それにとらわれるのではなく、一人ひとりの子どもの姿から出発することが重要です。子どもは自分が思っていることとつながっていくかたちで、新しい世界に開かれていきます。でも教師はついつい、計画があってそれを実行しようとする、自分の思いで進んでいってしまうなと思います。

同じく昨年度の、ケイ君という子どもをめぐる実践も興味深い問題を提起しています。ケイ君は3歳から入園してきたのですが、なかなか友だちと関わるできませんでした。時にはロッカーのところに座ってうずくまっているということもあって、子どもたちもどのようにやっていけばいいか悩んでました。いろいろな遊びに誘ってもあまり乗ってこない。そこでケイ君が何だったらやるかなあと考えたときに、「とりで鬼」という鬼ごっこには参加してくることがわかりました。とはいえ、普通に楽しんでいたわけではありません。「とりで鬼」ではとりでが安全地帯

で、そこに逃げている分には捕まえられる心配がないのですが、彼はとりでの上のほうに登るというかたちで参加しているのです。鬼ごっこに参加しているとはいえ、他の子と関わらないままだったんですね。

ところがその後、子どもたちがとりで鬼に飽きてきて、「泥棒と警察」略して「ドロケイ」という遊びを入れた頃から関係が変わりはじめました。ケイ君が逃げていきながら泥棒を助ける、というところに興味を持ったのです。それで助けるというかたちでみんなとつながっていく。あるとき子どもたちが、みんな泥棒になりたがって警察になりたがらないときがあったのですが、その時にケイ君が「じゃあ僕、警察やる」って言ったそうです。そうしたら周りの子が「ケイは足が速いから警察にならないで」って。以前の彼はそう言われたら怒ったでしょうが、その時にはスッと受け入れていました。

人に優しくする、嫌なことをしないということは、子どもにとってそう単純なことではなくて、そういう遊びの中で友だちの姿が見えてきた時に初めて、相手に対してそういう感情を持てるのだらうと思います。

——プロジェクトの試み

ここ3、4年は、和光の幼稚園でプロジェクトの試みを行っています。以前も総合活動として「のりもの」や「どうぶつ」の活動に取り組んでいました。しかし、それらを始めた当初は、強制されたものでなく子どもたちが自分たちで取り組もうと決めた目標のある活動、教師が提起したとしてもクラスの子もたちと展開を作っていく活動としてあったのですが、長く続けているうちにこなすとい

う感じが出てきてしまいました。活動が増えてきて、一つの活動に取り組める期間が限定されてしまったこともあるかもしれません。そこで活動のあり方を、今、変えてきているところです。現在は、「のりもの」や「どうぶつ」は、その年によってタイミングによって作る活動になっています。

子どもたちと一緒に活動をつくっていくと、いろいろな面白さが出てきます。去年ですと、『ヤンボウ・ニンボウ・トンボウ』のお話の世界がもとになって、アホウドリへと関心を広げていった活動がありました。アホウドリ

のことを子どもたちが調べていって、その過程で山階鳥類研究所の平岡さんという方と知り合って、平岡さんと手紙でやりとりしたのです。子どもたちは「手紙の返事、いつ来るかな」とドキドキしながら待っていて、それがまた子どもたちへの関心をより広げていくことにつながっていました。

プロジェクトはまだ始めたばかりで試行錯誤ですが、今はこのようなかたちでやっています。時間ですので、僕の報告は以上で終わります（拍手）。

[おおたき みつお・和光幼稚園・和光鶴川幼稚園園長]